

広島県の戦後復興における建築活動― 地域の建築家の設計活動を通して（前）

語り人：錦織亮雄（新広島設計事務所）

語る会コーディネーター・編集執筆：石丸紀興

（広島諸事・地域再生研究所）

編集協力：福馬晶子（広島市職員〈相馬市派遣〉）

はじめに

広島が復興したということをどのようなことから実感するであろうか。土木関係の人であれば土地区画整理事業が進行して、土地の区画が整備された状態になっていることが絶対・必要条件であろう。同時に主な道路が拡幅整備され、橋の架橋が進み、都市のインフラがほぼ整備済みであることも必要であるかもしれない。

とはいえ、このような土木的な面での復興の認識は、限られた側面であろう。街の復興を実感するためには、やはり街の隅々まで建物が建ち上がり、居住の場所が確保され、目にみえた形で経済活動が開始され、都市が確かに動いているという状態になったということでなければならぬであろう。このように建築的な側面における復興は、極めて重要で不可欠なことがある。

さらには市民、庶民はあくまでも日常生活が、「確かに元に戻った」とか、「これで何とかうまく行く」とか、「未来に希望が見えてきた」とか実感できるようになることであろう。そこまでいくには多くの努力や蓄積が必要となるし、真に復興といえれば文化的な側面やコミュニティを含めた社会的な諸側面において実感できるようにすることが必須条件であろう。

このように議論を展開するならば、最終的な復興の実現は多様な側面があり、すぐさま評価し難いので、別途検討する必要性があるものの、最もわかりやすい形で復興の実感は、建築的な側面を組み込むことではなからうか。外国人が広島を訪問して広島が復興したと実感するのも建築的な側面が大きいであろう。もちろんそこには極めて表面的な判断もあるが、確かに人の営みが確実

に回復しなければ、建築は存在しないのであるから、街に建築が建ち上がることで復興と捉えることはあながち間違いではなからう。

ここまでやや強引に論を進めてきたが、要するに本論においては、建築が建ち上がることを通して、被爆した広島県の復興を記述してみようとするものがその趣旨である。その他の多様な論説を排除するものではないので、様々な本論への反論や疑問論、そして補強論や展開論も歓迎である。いずれにしても、一定の仮説に基づいて、建築を通しての広島復興論を始めることとする。

以下、広島における一九四五（昭和二〇）年以後の建築活動、さらに言えば設計活動として捉え、記述することとする。そのため当時のことを詳細に記憶されている錦織亮雄氏を語り人として招いた「語る会」を実施し、その内容を収録・編集することとするが、併せてその前提たる当時の状況を少し解説した内容となるため、さらに二つに分けて全三部構成とする。すなわち、「第一部 戦後復興における建築活動の解説」と、「第二部 錦織亮雄さんの語りによる広島のことと河内義就の建築活動」を前編として今回収録し、「第三部 錦織亮雄さんの語りによる錦織亮雄自身の建築活動」を後編として次号以降に回すこととしたい。なお第一部の本文は敬称略とする。

第一部 戦後復興における建築活動の解説

一 建築活動と設計活動

建築活動を記述するといっても、建築の種類やその位置づけなど、さらに様々な側面がある。例えばこの時代に建築が成立する過程は公共建築であれば国や地方自治体、あるいはその外郭団体が予算を確保し、建設するという過程を通して成立するものである。通常、建物の建設主体のことを施主と呼ぶが、公共建築ではあきらかに施主は公共の団体である。そして民間であればそれぞれの主体が許される財力（借出し資金を含めて）の中で建物建設を進めるのであるが、大きな会社の営繕費もあれば全くの個人的財力でもって進める場合もあり、極めて大規模なビルや商業施設、工場もあれば、小規模の住宅や店舗もある。

この広がりの中には駅や倉庫、車庫などの運輸・通信施設、私立の学校や農業施設もある。ここで細かく分類することが目的ではないので、この程度の例示で終わらせるが、こういった建物の建設過程で建築家の関与がある。大規模な建物であれば通常組織的な建築事務所が関わり、中小規模の建物であれば、それなりの建築家・建築事務所が関わるのである。なかには特殊な形態もありうるが、組織事務所を含めて建築家の関与という建設活動の存在を確かに認めることができる。建築家・建築事務所も多種あつて、アトリエ的な設計事務所といわれるような単独であるいは小規模で設計業務を実施している場合もあれば、極めて大規模な組織事務所も存在している。その中間的な存在もみられるし、特別な専門分野を担当したり、下請けやネットワーク化された存在もある。大・中規模の設計事務所であっても、特徴的なデザインで注目される建築家を擁している場合もあつて、アトリエ的な場合もないわけではない。

その他施工会社による設計施工という形での設計活動もある。官庁営繕、あるいは会社組織下の営繕による設計活動といえる場合や、大工や工務店が関わる民間の多様な設計活動も存在する。最近の工業化住宅・建築では、いわばモデル的な型式が提示されて、それを選択するという過程での設計活動も存在することになる。すなわち、建築家・建築設計事務所が中心に関わる設計活動というのは、そういった様々なケースの一つの形態ということである。

要するに、建設活動全体を捉える時、設計行為は欠かせないのであるが、その中に建築家に依頼して設計するという過程が位置づけられる。ある建物がどの建築家あるいはどの建築設計組織によつて設計されたものであるかは様々な形で明らかとなり、必要となれば建築家によつてその設計思想（デザインコンセプト）が語られ、建築ジャーナリズムにも取り上げられて、時代の流れを体現した存在にもなるのである。こうした建築の集積が街並みを構成し、そこに建設活動・設計活動も経済活動や社会的な活動との関連性の一環として意識できる存在になるのである。

二 戦後における設計活動の再開

行政的にいえば戦後復興の主要な営為は土地区画整理事業であつた。そして

ここから市民生活の事実上の復興が始まるのである。戦後直後に建設された建物は仮設的で粗末なバラックか、バラックに近いものが多かったが、土地区画整理が進み、仮換地先が提示された頃から建築的に本格的な復興が始まる。一九四六（昭和二一）年に既にそのはしりといえる事例が出現しており、目立つような復興建築といえるような形で、広島で本格的な建築活動が開始されたのである。一九五一（昭和二六）年までの事例は表1のようなものであつた。

表1 広島復興建築とその設計者リスト（1946～51）

建設時期	建物名称(所在地ただし当時の旧町名)	・建築家(設計組織)・所属
1946 年	広島カトリック教会司祭館(広島市幟町)	・晩設計事務所・●
1946 年	朝日新聞広島支局(広島市基町)	・晩設計事務所・●
1947 年	広島県知事公舎(広島市幟町)	・広島県営繕課・●
1947 年	広島女学院中学校校舎(広島市幟町)	・晩設計事務所・●
1947 年	広陵高校(広島市宇品町)	・晩設計事務所・●
1948 年	山陽中学校(広島市鶴見町)	・晩設計事務所・●
1948 年	広島女学院講堂(広島市幟町)	・晩設計事務所・●
1948 年	毎日新聞広島支局(広島市基町)	・晩設計事務所・●
1948 年	広島児童文化会館(広島市基町)	・晩設計事務所・●
1949 年	広島ガスビル(広島市基町)	・晩設計事務所・●
1950 年	農協ビル(広島市大手町)	・晩設計事務所・●
1950 年	大正海上火災保険広島支店(広島市八丁堀)	・晩設計事務所・●
1950 年	皆実町公務員宿舎(広島市皆実町)	・中国四国地方建設局営繕部・●
1951 年	広島総合グランド本館(広島市観音新町)	・広島県営繕課・●
1951 年	広島通商産業局(広島市基町)	・中国四国地方建設局営繕部・●
1951 年	広島家庭裁判所(広島市基町)	・最高裁判所・○
1951 年	水野組ビル(広島市八丁堀)	・水野組・○
1951 年	広島市中央卸売市場(広島市水主町)	・広島市営繕課・●
1951 年	広島宝塚劇場(広島市新天地)	・藤田組・○
1951 年	三菱銀行広島支店(広島市草屋町)	・三菱銀行営繕部&藤田組・○
1951 年	平和大橋(元安川・大手町中島町間)	・イサム・ノグチ・○
1951 年	社会保険広島市民病院(広島市基町)	・晩設計事務所・●

注 ○外来建築家・建築組織 ●地元建築家・建築組織

その時、建築家による建築設計という行為がクローズアップされた。戦後広島でまず「晩設計事務所」と称する建築家集団が名乗りを上げ設計活動を開始した。設立当初は村田正や柴田実らが中心となり、終戦後間もない一九四五年十月から翌年三月にかけて設立準備を進めて、正式に一九四六年四月に設立し、その後河内義就が合流し、やがてソ連による抑留から引き揚げてきた大旗正二

などの建築家も加わって広島では目立つ建築家集団となっていた。

晩設計は、早くも一九四六年に幟町カトリック教会の司祭館、朝日新聞広島支局、一九四七（昭和二二）年には広島女学院中・高校校舎、広陵高校、一九四八（昭和二三）年には山陽中学校、広島女学院講堂、毎日新聞広島支局、広島児童文化会館などの設計を手掛け、まさに広島に新たな時代の到来を告げるような建築物を出現させたのである。

その後、新設された設計事務所や外来建築家を含めた設計活動により、さらに目立つような建築が続々と出現した（写真1）。

この時代は強度のインフレが進行中であり、建築資材も少なく、社会全体が安定しておらず建築活動は極めて困難であった。例えば前述した児童文化会館は多くの人たちの善意によって建設が始まったが、集まった募金があるみるうちに減価して建設費が不足して建設工事が難渋し、借金を広島市が肩代わりして完成させたという場合もあった。工事に使用する鉄筋もそろわず、材料集めに苦労したという話も多く伝わっている。しかし当時の関係者にはそれを克服する意思と気力があつた。なによりも新しい時代の到来に應えるような希望を見出していたのであつた。児童文化会館は戦後初の文化施設として基町に建設され、当時の子供たちの集う場所として利用され、そこで夢と希望を吹き込んだのであつた。時として機能を越えた建築の役割も備わることとなる。

こういった建物の設計が広島で設立された設計事務所や東京や大阪から入り



写真1 当時建設された耐火建築物
上 広島宝塚劇場
下 広島農協ビル

込んで仕事をする外来の設計事務所、地元の県・市の営繕組織、国・その関連機関の営繕組織、建設会社（ゼネコン）の設計組織、その他の設計組織によって担われていった。晩設計以外にもいくつかの設計事務所が設立され、また晩設計からも河内義就が独立して、村田と大旗が連合し、やがて村田や大旗もそれぞれ独立するなどして、事務所の増大、多様化が進んだのである。これらの事務所は競い合うように様々な建築設計を手がけ、また後継者が育成されて、さらに新たな事務所として展開していった場合もあった。

例えば河内義就建築事務所では表2のような建物を設計しており、一九六二（昭和三七）年八月に入所した錦織亮雄は、河内の設計を支えつつ、新たな技術的展開を遂げていたが、やがて独立して特徴的な設計活動につなげていったのである。

広島では現在も建築設計活動が盛んであり、若手建築家から大御所の建築家まで、国内でも注目される設計活動の拠点であり、話題を集める建築デザインも少なくない。そのような設計力とその目立つような活力は、実は戦後の広島で蓄えられ、発展していったものと考えられる。

そして広島は一九六〇（昭和三五）年頃までに一定の復興段階を迎え、概成といわれる段階に到達する。一九五八（昭和二三）年には広島復興大博覧会を開催したのである。都市は変容の勢いを止めることなく、さらに次の段階に突入し、街並みは高層化、高密度化し、復興から新たに飛躍することとなる。それは時代が切れ目のない流れのようであるが、しかし復興期という一つの時代から次の時代への移行があつたことが確実に認められるのである。

広島が焼失・破壊されて失っていたかつての都市活動を一定程度再開しようとしたら、新たな活動を開始しようとしたら、不可欠な空間装置を用意するのが復興建築というならば、この復興建築が一定程度建設され、集積した時、街並みが形成されることになる。すなわち復興建築の集積・蓄積でもって実質的な復興が成し遂げられる過程といえよう。土地区画整理が進行して街区が形成されただけでは復興段階と言えず、民間に資力と活力が行きわたり、循環を始めるところに至らなければならないのである。すなわち、インフラである骨格が形成され、筋肉や脂肪や神経が適度に組み込まれ、血管に生き生きと血液が流れる状態のような建築と都市に達することが必要だったのである。

表2 河内設計事務所時代の主な作品

	主な作品名称	(構造/規模・竣工年・所在地)
1	広島毎日会館	(RC造/5階建て・1954年・広島市・撤去)
2	矢野公民館	(木造/2階建て・1954年・広島県安芸郡矢野町・撤去)
3	I氏邸	(補強コンクリートブロック造/平屋・1954年・広島市・不詳)
4	宮島競艇場	(木造・1954年・佐伯郡大野町・撤去)
5	府中町公民館講堂	(RC造/平屋<一部2階>・1955年・安芸郡府中町・現存)
6	藤垂園団地計画	(1955年・佐伯郡五日市町・現存)
7	K氏邸	(木造/平屋<一部2階建て>・1955年・広島市・不詳)
8	シャンソン	(木造・1955年・広島市・不詳)
9	静養院	(RC造/2階<塔屋4階>・1955年・安芸郡府中町・不詳)
10	梅坪	(木造・1955年・広島市・不詳)
11	広島労働会館	(RC造/5階<一部6階>・1958年・広島市・現存)
12	広島建設会館	(RC造/3階建て・1959年・広島市・撤去)
13	宮島ロープウエー	(SRC造・1959年・佐伯郡宮島町・現存)
14	広島銀行三川町支店	(RC造/2階・1959年・広島市・撤去)
15	広島銀行広支店	(RC造/3階建て・1959年・呉市・撤去)
16	広島銀行練成道場	(木造/2階・1959年・佐伯郡大野町・不詳)
17	武田学園校舎	(RC造/3階建て・1960年・安佐郡可部町・撤去)
18	広島工業短期大学校舎	(RC造/3階建て・1960年・佐伯郡五日市町・現存)
19	楽々園プラネタリウム	(RC造/平屋・1960年・佐伯郡五日市町・撤去)
20	広島銀行保養所浴場	(木造/平屋<部分2階>・1960年・佐伯郡大野町・不詳)
21	広島ゴルフクラブハウス	(SRC造・1960年・佐伯郡五日市町・撤去)
22	広島市医師会原爆殉職碑	(上野勇と共同)(RC造・1960年・広島市・現存)
23	府中南小学校校舎	(RC造・1961年・安芸郡府中町・撤去)
24	国泰寺中学校屋内体操場	(RC造/平屋<部分2階>・1961年・広島市・現存)
25	広島電鉄女子寮	(RC造/5階・1961年・広島市・撤去)
26	呉信用金庫及び事務センター	(日建設計と共同)(SRC造/8階・1966年・呉市・残存)
27	広島県立美術館	(広島県営繕課と協力)(RC造・1968年・広島市・撤去)
28	呉商工会議所	(SRC造・1969年・呉市・現存)
29	広島県立産業会館	(RC造/平屋・1970年・広島市・現存)
30	広島工業大学附属図書館	(RC造/3階・1971年・佐伯郡五日市町・現存)
31	岩国センチュリーゴルフクラブハウス	(RC造・昭和50年・山口県岩国市・現存)
32	みゆきプラザ	(SRC造・1978年・広島市・現存)
33	真光寺本堂	(S造・1979年・福山市・現存)
34	広島銀行本川支店・本川信愛ビル	(SRC造・1979年・広島市・現存)
35	広島県立身体障害者リハビリテーションセンター	(SRC造・1981年・東広島市・現存)
36	山県西部消防組合消防本部庁舎	(RC造/2階・1982年・山県郡筒賀村・現存)
37	広島県立広島井口高等学校	(SRC造・1982年・広島市・現存)
38	広島県立社会教育センター	(RC造/4階・1982年・広島市・現存)

RC造:鉄筋コンクリート造 SRC造:鉄骨鉄筋コンクリート造 S造:鉄骨造

第二部 錦織亮雄さんの語りによる広島のことと河内義就の建築活動

はじめに

この第二部は、二〇一二（平成二四）年十二月一日に実施した「時代を語り建築を語る会」において語り人錦織亮雄さんから得られた情報をもとに編集したものである。この「語る会」は実行委員会（代表石丸紀興）形式で、日本建築学会中国支部、日本都市計画学会中国四国支部、および広島県建築士会の後援により実施された。その趣旨は以下に示すようなものであった。

時代は切れ目なく続いていくものかもしれませんが、見方によればある時代からある時代へ移っていくものでもありません。すなわち、時代を区分するという観点は、歴史を意識し、記録し、検証し、語り継いでいく上で欠かせないと思われまます。それはこれからのような時代を迎えることとなるのかという時代感覚の形成、あるいはこれからの時代のような時代にしていくのかという時代精神の育成といったことにも繋がっていくことでしょう。一方、建築のとらえ方は、単体のデザインに限定するところから、社会との関わりで存在する空間づくりや政策展開という様々な営為まで、多様な解釈が可能です。広島は戦前・戦後を通じて建築と関わりながら、特異な変遷をたどってきたといえます。そこで、「建築を通して時代を語り、時代を聞く」という試みは大きな意味を有する行為として存在して参ります。

かつて広島県の戦後の建築界をリードした暁設計とその関係者からお話を聞く会を企画し、開催したことがあり、一定の成果を蓄積することができましたが、あれから三十年余を経過した現在、新たに時代を語っていただく方々の存在に気づき、その機会を設けることの必要性を意識することとなり、ここに錦織亮雄さんをお招きし、お話を伺うこととしました。

広島県の戦後の建築界をリードし、建築の分野で戦後の復興を担った暁設計とその関係者（河内義就さん、大旗正二さん、村田正さんといった

方々）からお話を聞く会を企画し、開催しました。この方々を戦後広島第一世代と考えますと、その世代を支え、引き継ぎ、さらに展開した第二世代の方々の中からまずお願いしました。お聞きしたいことは、①第一世代をどのようにながめ、評価し、とらえておられましたか、②第一世代からどのようなメッセージ、遺産、薫陶を引き継がれましたか、③第二世代としてどのような取り組みをなさいましたか、デザイン方針、建築界のリード、社会的活動の展開等の内容とその意図、成果、反省等、④その後の広島県の建築界へのメッセージ、要望・注文、等々です。

この語る会は連続して実施する予定としており、第一回はかつて広島大学工学部（建築計画学）に助教授として勤務され、その後佐賀大学教授に転勤された丹羽和彦先生が、二〇一二年七月十四日に逝去されたことから、丹羽和彦先生の広島でのご活躍を想起・記念して、「故丹羽和彦先生追悼記念」という表現を頭書に挿入することとしている（ポスター参照）。

以下当日の語る会の記録である（本文中で敬称略の場合あり）。

故丹羽和彦先生追悼記念

「時代を語り建築を語る会」

戦後復興・戦後広島県の建築界を担った第一世代を語り継ぎ、展開した第二世代の代表的存在である錦織亮雄さんをお招きしてお話を伺います。

時代は切れ目なく続いていくものかもしれませんが、見方によればある時代からある時代へ移っていくものでもありません。すなわち、時代を区分するという観点は、歴史を意識し、記録し、検証し、語り継いでいく上で欠かせないと思われまます。それはこれからのような時代を迎えることとなるのかという時代感覚の形成、あるいはこれからの時代のような時代にしていくのかという時代精神の育成といったことにも繋がっていくことでしょう。一方、建築のとらえ方は、単体のデザインに限定するところから、社会との関わりで存在する空間づくりや政策展開という様々な営為まで、多様な解釈が可能です。広島は戦前・戦後を通じて建築と関わりながら、特異な変遷をたどってきたといえます。そこで、「建築を通して時代を語り、時代を聞く」という試みは大きな意味を有する行為として存在して参ります。

かつて広島県の戦後の建築界をリードした暁設計とその関係者（河内さん、大旗さん、村田さんの方々）（戦後広島第一世代）からお話を聞く会を企画し、開催したことがあり、一定の成果を蓄積することができました。

あれから 20 年余を経過した現在、その世代を支え、引き継ぎ、さらに展開した方々（第二世代の方々）の存在に気づき、その機会を設けることの必要性を感ずることとなり、ここに錦織亮雄さんをお招きし、お話を伺うこととしました。

語り人 錦織亮雄さん
（広島県建築士会会長、新広島設計代表）

日時 2012年12月1日(土) 15:00~17:00

場所 広島YMCA国際文化センター本館 408号室
（広島市中区八丁場 7-11 2202-227-5815）
（なお、会場には駐車場がありません。周辺の有料駐車場をご利用ください）

参加費 1,000円（資料費・会場費として、ただし学生・院生は無料）
当日先着 40 名程度まで。参加申し込みを必ずしも条件としませんが、そのメールまたは当日の参加希望の連絡をお願いいたします。

連絡先 問合せ 広島県建築士会・地域共生研究座（広島市中区八丁場 1-23-1114）
ninar5@ninar.com TEL/FAX 022-223-7226

主催 時代を語り建築を語る会実行委員会（代表者 石丸紀興）
後援 一般社団法人 日本建築学会中国支部
（公益社団法人）日本都市計画学会中国四国支部
（財団法人）広島県建築士会

「時代を語り建築を語る会」のポスター

語る会における語り

(1) 生い立ちから建築分野へ

講演の書き起こし部分については紙面の都合上、公文書館において、補記等の修正を行ったほか、錦織氏の昭和三十六年以降の建築設計活動とその背景となる個人的体験を中心とし、その他の部分を割愛する編集を行った。

語る会の趣旨と錦織さんの紹介

コーディネーター石丸紀興(以下コーディネーターと略) 本日の一連の企画・催しは、かつて広島大学におられました「故丹羽和彦先生を追悼する記念行事」ということにさせていただきたいと思います。面識のない方もいらつしやると思いますが、丹羽先生は広島大学に三年間だけしかいらつしやらなかったのですが、非常に熱心に学生を教育、指導され、大きな役割を果たされたと思います。丹羽先生は建築の歴史の分野、建築計画の分野を研究されていて、良い建築といえますか、面白い建築が非常に好きな先生でしたので、例えば、「愛媛県松村正恒さん設計の日土小学校は面白いよ」とか言って、よく話をされていたのですけれど、そういった先生のお考えに沿って、広島で建築について考えていく機会を設けることは丹羽先生にも喜んでいただけたかなということで、始めさせていただきます。

実は三〇年ほど前ですけども、場所もこのYMCAで、当時、大旗さん、村田さん、河内さん、そういった方々のお話を伺うような機会がございました。その結果につきましては、今日お配りしております資料に、暁設計から大旗さん、村田さん、河内さんの三編の論文がございます。それから李明さんが書いた、『ヒロシマの復興を支えた建築家たち』という、今年の出版物にまとめさせていただいております。

私は、その時代の建築家を第一世代と、復興を支えた建築家ということとでらえているのですけれども、そういった人たちの次の世代、先輩たちを支えながら、いろんなことを継承しながら活躍・活動された第二世代の人たちのお話をいつか聞きたいと思っておりました。その候補の中で、ある意味では、最も適当な方とおっしゃるのですけれども、錦織さんをお招きすることができまし

た。錦織さんは多才な方で、いろいろお話いただく内容をお持ちの方なので、一回ではすまないかもしれません。二回、三回と続く可能性もあるのですけれども、まずは最初のきっかけとしてやらせていただければと思っております。

錦織さんにつきましては、私があまり詳しく紹介する必要はなくて、ご本人がすごい年表資料を用意されておられますので、その話の中で充分お聞きできると思うのですけれども、昭和三十六(一九六二)年に京都工芸繊維大学の建築系を卒業されて、三座(さんざ)の設計建築事務所、それから河内義就さんの事務所で昭和三十六(一九六二)年から設計活動をされ、その後独立されて「都市建築研究所」を創設され、現在、建築家協会等いろいろな団体、組織がございますけれども、そういったところでも要職に就かれておられます。さつそくですけれども、河内設計事務所に入所されたころの先輩たちが、どういうふうな仕事をされていたか、どういうふうな形で協力されたか、どんなことを考えられたか、感じられたか、そういったことあたりから、お話をうかがっていきたいと思います。

幼少のころ、そして被爆のこと

錦織さん ご紹介いただきました錦織です。(河内設計に)入所したところからということですけども、私が生まれました一九三七(昭和十二)年十一月三日から先般七五歳になりました、ここに七五年分の年表(大部のため本稿においては略)を刷ってききましたので、ご覧いただきたいと思います。

どこで生まれたかということをお明らかにしておく必要があると思うのですが、前(の席)に松波さんがいらつしやっています、戦後の子供の話を写真展があつて、そこでギャラリートークをやったことがあります。私が「白島中町七番地で生まれました」というふうに言いましたら、白島の戦前の戸別地図を作っている人がいらつしやつて、その人が戦前の戸別地図を持って来られたのです。私の家から長寿園は、これ今高層アパートになつていますけれども、ここに土手の上に道がずつとありまして、そこから、土手から降りると石段で、ところどころにスロープがあります。降りると砂浜のような、原っぱのようなところに、桜の木が植わつていて、公園があつて、その向こうに石組

みがあつて、番線で止めたところがあつて、太田川が流れているところ。私の家から長寿園までは約七〇メートルです。なんでこれを見せるかというと、私はここで、まさにこの場所で原子爆弾に遭いまして、たつたこの七〇メートルを這いずり回つて一家でここ（長寿園）まで逃げて、ここで一晩半ほど過ごしたのですけれども、その一晩半ほど過ごしたのが、私の集約された被爆体験です。その間にいろんなことがありました。生まれをはつきりとしておきたいと思いました。従つてこの、広島の被爆の状況というのは私の原点のようなもので、いろんなことをやるたびに、考えるたびに、ずっと頭にひっかかっているということです。

実は白島北町に少しだけ燃えていないとがあります。原爆の後の状況というのは本当にすごい状況で、前にそれを話していて、一部の人はご存じだと思いますが、私は涙が出てものが言えなくなりました。それは（今日は）話しませんけれども、ただ白島北町の町内会の人が大けがをしたり、火傷を負ったりしながら、みんなでいろんな道具を持って、ここに逃げる途中で出会ったのですが、ここに立つて燃えてくる火を消すために整列していたのです。私は小学校二年生ですから、子供だったのですけれども、「すごい人たちがおるなあ」と思つて見たのですが、その結果として、ここが少しだけ焼け残っているのです。私の人間に対するというか、人に対する認識が、みんなで力を合わせればいろんなことができる、いまだに思っている理由が、その辺にあるのではないかなと思います。

戦争のこと終戦のこと

錦織さん 今日、戦後の生まれの人がほとんどではないかと思ひますので、これから戦後のことになるのですが、広島で仕事をしはじめたときには、戦争で満州や朝鮮から帰ってきた連中ばかりと一緒に仕事をしました。それで、みんな戦争体験のもとに広島のまちづくりを最初はしたような気がするのです。

（中略）

戦後の日本は占領されました、占領時の（都合の）悪いことはほとんどアメリカ軍に没収されたのです。最近までいろいろわからなかったけれども、実際

には文書は全部検閲があるし、言葉づかいも、原子爆弾が悲惨だかということさえも言えないような感じで、平和と民主主義という言葉がすぐ流行った、ということなのですが。

「二年前にガダルカナルで戦った二人」というアメリカの進駐軍の兵士が、たぶんこの女性は日本の女性、それを連れて歩いているのと、満身創痍でやせ衰えている日本軍の軍人を描いた戦後の漫画なのですけれども。実際に悲惨です。私が経験しただけでも、こういうことを言つてはなんですが、特に豪州兵などは品が悪くて、果物屋さんの前を通つたら、積んであるリンゴを一人一つずつ全部とっていくのです。

実は私は小学校の二年生のときに、不登校つてここに書いてありますけれども、昭和二三（一九四七）年から二年間ほど学校に行かせてもらえなかったのですよ。親父が軍人なもので、教科書に墨を塗る宿題が出ていて、その宿題をしていたら、庭に引つ張り出されて殴られまして、教科書に墨を塗るようなことはするなつて。学校の宿題だから仕方がないと、お袋といつしよに抗弁しましたけれども、ぜんぜん昔の親父はそういうことは聞いてくれません。あくる日から、そういう宿題を出す学校には行くなと言つて、ずっと行かせてもらえなかった。そのとき親はバージ、戦争犯罪人の公職追放にあつていましたから、七塚原（庄原市）で牧場をやることになつていて、牧場なら追放に関係ないので、そこへ毎日連れていかれて、私は動物を飼ふことばっかりずっとやっていたのです。ですから小学校低学年の教養は、私にはないのです。簡単な漢字の書き順がいまだに自信がないとかいうことがありますけれども。

うちの家も原爆にあつた後、庄原に疎開しましたけれども、疎開した庄原の家に刀剣とか能面とか、家宝のようなものがいっぱいあったのですが、（占領軍兵士が）ジープでワーッと乗りつけてきて、土足で上がつてきて、全部持つて行つてしまったのです。損害賠償を訴えたい気がしますが、相当屈辱的な状態と、特に広島の場合はこの状況を見ていただければいいのですが、要するに戦争が終わつたときの日本というのは、こんな状況からスタートしたということです。

（中略）

(2) 戦後の建築設計業界

河内設計のこと

錦織さん それで、少し河内設計の話になります。河内さんと私が会ったのはわりと早くて、私が就職したのは、昭和三十六年。最初大阪に勤めたのですが、大阪で三座に徳永正三さんという早稲田を卒業したずいぶん立派な（建築家がいて）、芦屋にあった炉山居という自宅がすごく名作なのです。それを見て私は憧れてそこに入ったのですが、なかなか大阪の丁稚奉公はきつかった。戦後、私の父親が広島県PTAの連合会の会計係をしております、それでPTA会館を造ることになって、広島でコンペをしたのです。そのときに親父は私を早くから建築の道に進めようと思って、中学、この年表でいいますと、「河内義就・木村俊夫を知る」というのは、昭和二七（一九五二）年になります。それで学校に行かせないときに、私はアメリカの雑誌の住宅のプランを毎日一枚ずつ、ずっと親父にコピーをさせられていて、なんとなく建築に興味があったので、二七年のその（コンペの）ときに、親父からも行ってみなさいという話で、河内設計ができあがったばかりのときから知っていました。河内さんの友達で朝枝春介さんが、京都工芸繊維大学の意匠科の先輩なのですが、私が戦後広島でうろうろしたり、いろいろしていると、いつも河内さんのところへ連れて行ってもらったりしていたから、知っていたのです。そういう状況で、大阪へ就職しましたが、広島に帰って来い、広島に帰って来いと言われていたから、広島に帰ったのが昭和三十六年です。

その間に学校は、私は六〇年安保の世代だし、ここに広島の「復興を視る」と書いていますけれども、視ながら育って、河内設計にということに。

河内さんの思い出

錦織さん これ（写真2）は河内さんにたびたび言われて、私が最近いろいろな人に広島復興を伝えるときに、いつもお見せしている朝日新聞広島支局です。これバラックなのです。つまり焼け野が原に、本当にそのへんの材料を集めてきて、バラックで朝日新聞を建てたものです。村田さんも河内さんみたいそう自慢にしているのが、このチムニーなのです。こんなもん、何の役にも立

たないものがついているというものです。二人とも、河内さんは小さいときに出会ったときから、建築家になれと言つて。中村順平さんの教え子ですから、エコール・デ・ボザール流建築家のかたまりなのです。河内さんに建築家になれと言つて言われて。建築家というものは、バラックを建てるときに、こういうことをするものだということをずっと言われて、その後も何度も何度も、この話は聞いています。年表にもありますけれども、昭和五三年に日本建築士事務所協会の全国大会が広島であったときに、私は「広島と建築設計事務所」とかいう題の大シンポジウムのコーディネーターをやりましたけれども、そのときにも、この写真を見せているので、いわく因縁のものです。

児童文化会館のこと

錦織さん 児童文化会館（写真3）、これは石丸先生などの研究で明らかにされているところでしょうけれども、児童文化会館そのものができたという因縁話もあります。いわばメタフィジカルというか、子供の教育だとか、演劇だとか、音楽だとか、スポーツだとかということから広島の復興は始まっていますけれども、その子供の教育のために先生方がつくった集団が、お金を集めて造ったものです。河内さんの設計です。それで、これは木造の建物ですが、河内さんは横浜工専の出身で、東京にいたとき、演劇が好きで、ずっと築地小劇場へ通っていたということなんです。それで、築地小劇場の劇場を模して造った。児童文化会館なのに、少し大人っぽい演劇の仕掛けがしてあるというね、これも、自慢の種だったわけです。木造で、たぶん一部は、どこかの倉庫か何かを持ってきたりして、すぐに老朽化したのですけれども、最初から老朽化した建物で造ったものです。寄付でやった



写真3 児童文化会館



写真2 朝日新聞広島支局と壁に敷設された暖炉の煙突

ものですから。

基町と卒業設計

錦織さん その二七年に河内さんに会ったのですが、広島でうろうろしている時代に、この基町の公営住宅（写真4）とか、後にはその中にバーができたりにして、ぶらぶら散歩できるような感じになっていました。これ（写真5）は河岸の広島建築で、今では、ある意味で懐かしいみたいですが、どこの国かという感じがすけれども、この中にもバーがあったり、いろんなものがあつたりして、結構人が出入りしていたりしたのです。

私は卒業設計を昭和三五年頃から始めて、広島都市計画をずっとテーマにしてやっていたのですけれども、そのときに市役所の銀山さん（匡助・当時土木課長、後助役）などに会っていただきました。単なる一介の学生なのに、すぐ銀山さんにかわいがつてもらったり、市役所のデータをいっぱいもらったりしました。今ではまったくありえない話なのですけれども、そういうことがありました。河岸のこの建築、基町界限はすいぶん歩きました。この写真は基町ではないことですが、基町ではこの下に、潮が引くと砂浜ができませんから、その砂浜のところに石を積んで、みんなで集まって、たき火をして一



写真4 基町に建設された住宅群



写真5 河岸の建築群（猿猴橋付近）

杯飲むみたいな、コミュニティセンターみたいなものが、砂浜にいっぱいあつて、そこに夜になつても子供も一緒に集まって、騒いでいるような、そういう感じの空間でした。

福屋旧館、新たな道路、平和公園など

錦織さん 被爆後すぐは大きな建物が建っていませんでしたから、道路を広げるとか、狭かった道路を広げるとかいうことで苦心惨憺して、みんな働いたわけです。

これ（写真6）は福屋の旧館ですが、この道路をここまで広げたということ。新築建物がこちらから建っていますから、こういったものは後から全部なくなつて、こういう状況になるわけです。夢いっぱい。戦後の広島焼け野原のまだ続きのような原っぱだったのです。そのときに、三宅一生さんにしても榮久庵（憲司）さんにしても、みんなが語るの、これ（写真7）平和大通りですけど、原っぱに寝転んで、未来の夢を語ったり考えたりしたということですね。平和大通りなのですから、平和大通りとは言えないぐらいの、ただの原っぱ



写真6 八丁堀の道路拡幅工事



写真7 建設中の平和大通り

だったですから。名前だけここに大きくね、平和大通りと書いてあって、実に面白いと思います。

道路を広くしましたけれども、車が少なかったから、お父さんと子供が三輪車で遊んでいたりにしてました。それが、昭和三五（一九六〇）年ぐらい、高度経済成長が始まるころになると、だいたい広島のマインストリートは、排気ガスがもうもうという状態だったのです。福屋の前はもう雨が降ると必ず何センチか水がたまりましたから、助け合いながら渡っていくような状況でした。

昭和二六（一九五一）年に広島で国体があったのですけれども、そのときには平和大通りにまだ家が建っていましたし、平和大橋は造りかけで、青いブルーシートで囲って隠して、何とか国民体育大会をしたという状態でした。その当時は、市役所の人、県庁の人、みんな一緒になって総出で競技場をつくったのです。土で。ですから土で固めた土掘りの競技場ばかりです。観音の競技場にしてもそうだし、二六年の国体のサッカー競技場は現在の国泰寺高校のグラウンドですが、あそこも盛り土のスタンドがありますよ。

平和公園、この辺りはみんなね、佐々木雄一郎さんの写真なのです。佐々木雄一郎さんは生前、私と、友達つきあいだったのですけれども、今はこういう写真は全部、平和記念館に寄贈（実際は寄託）されたのです。ただ何千枚かは私に金儲けしないなら自由に使って下さいという遺言がありますから、みなさんにお見せしても構わないと思います。

丹下健三さんのこと

錦織さん これ（写真8）は丹下健三さんが自分で撮った写真で、磯崎（新）さんがお気に入りの写真です。去年（二〇一二年）磯崎さんが「都市広島の意味を考える」というシンポジウムをやりました。そのときこれを磯崎さんが、「丹下健三さんが、平和公園を建築的ということもあるけれども、そのメタフィジカルというか、相



写真8 丹下健三が撮影した平和記念資料館

当精神性を込めてつくったということがあって、墓と新しい建物とを対比したこの写真を非常に気に入って撮影した」と言っていました。

昭和三〇年に丹下さんが平和式典に来ているのですが、それで撮った写真がたくさんありますけれども、このときに慰霊碑の反対側はまだ民家があって、まだ平和公園の中に家がいつぱいあります。ただこの平和式典の雰囲気はまったく違いますよ。今はいろんな防衛線がいつぱい張られて、きれいに整列して何かすごく形式化、日本のいろんなことが、形式化していると思うのです。それに比べたら、もう迫力満点の平和記念式典だったのですけれども。ただ、迫力満点の式典だったから、家があっても平気だったということです。

（3）河内事務所の構想提案

河内義就とバスセンター、さらに淡水化計画、猿猴川再開発

錦織さん これ（写真9）は、バスセンターですけれども、バスセンターも河内さんの自慢の種で、バスセンターという、いろんなバス（会社）が一緒に使うセンターができたのは、河内さんに言わせると、日本で初めてだということ。河内さんは広島一中で、たぶん岡本悟さんと同級生であつたと思いますけれども、岡本悟さんは、今は国土交通省、昔の運輸省の高官だったのです。それで後に参議院議員になられて、広島湾の淡水化計画というのを河内さんが一生懸命がんばってやっていたときには、二人で一緒にやっていたのですが、（バスセンターも）その二人の発想だと思っています。それで、運輸省の肝いりもあって、バスセンターというのができたということです。



写真9 広島バスセンター

バスセンターができた直後ぐらいに、私は河内設計に就職したのですが、だいぶ年表も進みました。この一九六一（昭和三六）年のところに「猿猴川再開発」と書いてあります。実は猿猴川再開発のことは昭和三〇年代というか、昭和四〇年ぐらいまで、さらに四〇年をもつと超しているかもしれませんが、これは河内さんの発想なのです。猿猴川というのは、今はわりときれいになりましたけれども、ドブ川のようになっていたのです。広島市の地図をみるとわかりますが、広島には川がいっぱいあって、広島駅というのが、今だったら川の上に橋架けてつくると思うけれども、川を避けてつくるといって、あんなやこしい東の端のところにつくらなくてはいけないのです。もともと練兵場が後ろにありましたから、そういう軍事的な意味もあるのかもわかりません。また、駅の前の広場がすごく狭いのでね。狭いといっても川があるから狭いので、川を閉じ込めれば、そりゃいくらでも広い駅前広場になりますが。そのため駅の周りを活性化しようと思ってもできないというのが、広島のみちづくりの悩みの種でした。それで、猿猴川を埋めて、そこを再開発しようということを考えていたのです。

河内義就さんのこと

錦織さん 石丸先生の本にありますように、農協ビルだとか広島市民病院だとか、（広島）ガスビル、医師会館、児童文化会館、他にもたくさんありますけれども、あの当時の広島市の建築は市民病院などでも、日本の建築の最先端をいく建物だと思います。そういうふうなものをたくさん広島でつくる。暁設計のときにつくったのですけれども、デザイナーは河内さんなのです。それで、そこから先、（昭和）三六年ぐらいから、一九六〇年からは、急速に都市計画的な、広域な計画に、傾斜していったのです。それで、河内さんが発想するので、図を描いたり模型をつくったりするのは、私たちが、ほとんど私が中心かもわかりませんが、やったということです。

これ（写真10）、わかりますよね。ここを鉄道が走っていて、これが広島駅ですよ。川を埋めて、このようにしたわけです。これが広島駅です。猿猴川を全部埋めて集合住宅をつくらうという。こういうデザインは若手である私たちが考えたのです。河内さんは、こういうデザインなどは、もう当時は、そういう

些末なことには関わらないで、大きな計画を考えていらつしやった。だから、そのために、国交省河川局長か下河辺淳さんだったと思いますが、直接かけあいに行ったり、岡本悟さんを通じて、田中角栄に会いに行ったりとか、いろんなことをいっぱいして。ただ、河川を埋めるということは、当時であつても乱暴な、大変なことで、それは、難しくできないことがわかったのですが、ただ、非常に意気軒昂たることでやっていたのです。

意気軒昂たるということ言えば、

暁設計の時代には福屋の旧館の焼け跡にいたのですが、焼け跡がまた火事になったり、いろんなことをしたのですけれど、ものすごい人、猛者ばかりがいました。上野勇さんは岡田・上野という事務所をつくったりして。とにかく戦後広島で、例えばアンデパンダンの展覧会みたいな、美術展みたいなものをしょっちゅうやっていたのですけれども、そういうときにみんな、赤い絵の具をいっぱいべたべた塗って、そこにハエを捕まえてきたやつをいっぱいばらまいて、キャンバスの上で、赤い絵の具の上にハエをいっぱいくっつけた作品、そんなものを作ったり。河内設計も仕事が終わると毎日飲んでいたようですが、その暁設計でも飲んでいたようです。これも、上野勇さんや松島泰さん、昔の人たち、河内さんも含めて、その乱暴であつたことをすごく自慢していました。

石丸先生の本にも市民病院の底を4センチのコンクリートで打ったという話を書いてありますけれども、その話は河内さんが言っていて、そのとき現場を担当した松島さんが番線を組み合わせて配筋したらということを書いて、4センチで打つてみせてやるというので、打ったということです。河内さんはデザイナーですから、ここは薄い方がいいとか、ここは厚い方がいいとか、いろんなことをやっただと思いますが、後ろに、バックアップをするすごい技術者集団、とかいうような上品なものではないのですが、意地っ張り集団がいっぱいいる中で、

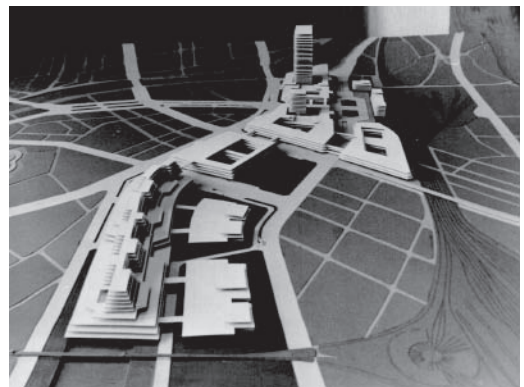


写真 10 猿猴川再開発模型

やっていたのです。河内設計になってからも、私が河内設計に（昭和）三六年に入ったときは、上野勇さんが現場を担当してやっていらつしやいました。

平和大通りの慰霊碑

錦織さん しかし、例えば、お医者さんと看護婦さんの、合掌の形をしたコンクリート打ち放しの慰霊碑（広島市医師会原爆殉職碑 写真11）が平和大通りにありますけれども、あの形は何でできたかという、私も遊びに行ったりして知っているのですが、あれは粘土で模型を作ったのですが、粘土を弁当箱に入れて保存していたのです。それで、今から粘土であの慰霊碑の形を作ろうかいうときに、うまくなかなか弁当箱を逆さまにしたいても粘土が出てこないで、縦に筋を入れて、こっちにも筋を入れて弁当箱から粘土を出したわけで、あんな形になったのだそうです。ですから弁当箱から出した粘土がこんな形になったやつをそのまま立てたのです。少しかわいらしく線型を作ったり、小さな、非常に首の長いハトがいたりして。ハトとかは後の話ですが、弁当箱から出したのがあの様になったという話です。わりと乱暴にいろんなことをやっていたのです。

私は昭和三六年に河内設計に入りましたが、ものすごく忙しかった。河内設計に入るときに、生意気の盛りでして、千日経ったら辞めまうと言ったのですけれども。ものすごく忙しくて、ほとんど寝てないのではないかなというぐらいだったです。



写真 11 広島市医師会原爆殉職碑全景と
中段に据えているハト（上野勇担当）

河内設計での仕事のやり方

錦織さん だんだんいろんなことをたくさんしようということになって、後から少し言いますが、九州の仕事をしたり、東京でも仕事したりとか、いろんなことがあって、鏡ヶ成国民休暇村というのをやるのに、東京事務所というのを作ったのです。

それで、その東京事務所に、私は派遣をされていた時期が長いのですが、そのときにいたのが東京芸大を卒業した山田荘彦君。後にクウェートとかバグダッドとか、いろんなところで仕事をする人です。それから、山田荘彦君の同級生で岩崎駿介君がいて、後にエンクルマ大統領に憧れてガーナに行つて、ガーナからハーバード大学、ハーバード大学からボストンの市役所に行つて、ボストンの市役所から日本に帰つて、飛鳥田（一雄）さんの下で横浜の計画をやる。その後いろんなボランティアセンターのことをやつたり、凡人会議の事務局長をやつたり、参議院に立候補したりで、今は茨城県の山の中に大きな家を奥さんと二人だけで自作で作つて、そこにおります。去年何かの建築家協会の特別賞（二〇一一年度環境建築賞）を取つたすごく立派な建物を自分でつくっていますけれども、家は岩崎書店という本屋なのです。その岩崎駿介君、山田荘彦君と私を知り合ひだつたから、河内設計の東京事務所に呼んで、みんなで東京の仕事をしたというわけです。

多くの建築の仲間たち

錦織さん なぜ知り合ひだつたかというと、昔は、私が大学へ行っているころは、デザインだ、計画だという大学はたぶん日本で二〇もなかったと思います。十五ぐらいだったと思います。それが建築学生会議というのを作つて、非常に先鋭な活動をしていて、それでみんな知っていたわけですね、早稲田の誰がいるとか。その当時、名古屋工大に黒川雅之がいて、いまだに友達ですよ。それから他にも、いっぱいいるので、そのときに東京芸大に私よりも一年下に、岩崎駿介とか山田荘彦とかがいました。それらと一緒にハーバードの建築大会に黒川紀章さんが日本の代表で行くために、みんなで金集めたり、いろんなこともしたのですが、そのときにハーバードに論文を提出するための合宿を伊豆の温泉でやつたり、ということで、学生時代から知っていたのです。それで東京

事務所にという。その東京事務所の下に、浅田孝さんが丹下健三さんから離れて仕事をしていました。浅田孝さんは、その当時に、日本をいじくるとかね、日本にはしごを掛けるとかと言って、瀬戸内海に三本も橋を架ける案は、たぶん浅田孝さんがそのときに作っていたような気がします。それから近所に大高正人さんが前川さんから離れて事務所をつくったばかりで、他に黒川紀章さんも、まだ大学院にいたように覚えています。事務所がありました。そこにも同じように芸大を卒業した内牧君という人が専務でいて、その内牧君が夜な夜なその東京事務所に遊びに来て、我々も黒川紀章さんの留守中に黒川さんの事務所に行つて、当時黒川さんは仕事がないから、雑誌に記事を書くので食っていますというふうに言っていましたけれども。山形の仕事とか、どこかの工場で、メタボリズムではないけれども、柱にいっぱいジョイントがある初期の作品がありますが、そういうふうなものをやっていました。それで、代々木の東京事務所は千駄ヶ谷にあったのですが、あの辺に、いろんな設計仲間がいっぱいいて、わいわいがやがややりながら、現在の、竹下通りのあの辺の喫茶店でたむろしたりして、それでこういう模型を作ったり、他にもいろんなことをやりました。



写真 12 宮浜温泉の石亭

これ(写真12)は宮浜温泉の「石亭」ですが、「石亭」のいちばん最初は、そのときの河内事務所東京分室が設計した作品です。このときもすごくみんな、いきりたっていますから、「石亭」に行つて、あの離れをご覧になったらわかると思いますが、あれ、屋根を支えている構造体と床を支える構造体は別ですよ。あとから農協が何かで、大高正人さんがそういうことをやりましたけれどもね、一つの建物の、床を支えるのと別に、屋根を支える構造体をつけたのです。庭園のデザインとかいろんなこともやったのですけど。これは東京設計室の仕事です。たぶん、ほと

んどみんな知らないのではないかと思います。

猿猴川埋め立て計画やその他大プロジェクト

錦織さん 河内さんは猿猴川埋め立てとか、その後一九七〇(昭和四五)年頃、もつとあとまで、ずいぶん大きな構想をいろんなことを考えていました。その最大のものが、この広島湾淡水化計画というプロジェクトです(図1)。河内さんは、私が昭和三六年に入所しまして、いろんな仕事をいっぱい、とにかく普



図1 広島湾淡水化計画と世羅賀茂台地送水計画

通の建築の仕事をやりましたけれども、そういうことにかまけている暇はないぐらい、大きなことをやっていました。

これは広島湾ですけど、この広島湾をずっと閉鎖して淡水化しようと。一七五平方キロ、二〇億トンの水がここにあるので。ここは広（呉市）ですけども、これ新広島港と書いてあります。広をもつて、広島の新しい港をつくらうという。淡水化して浄化して、この水をこの世羅台地というような水不足のところに、「世羅賀茂送水管」で水を回して広島を救うというような感じになっていました。ここに、山陽道とか、中国縦貫道とか書いてありますけれども、これは一九七〇年に出した図です。それまでに、この水を噴水で浄化したら、高さがどうかとか、そういうことを検討したり、いろんなこともあったわけですけども。他にも広島湾というのは潮の満ち引きがすごく激しいですね。そのために広島島の河床の景観というのは、良かったり悪かったり、つまり、潮が満ち引きする川ということで、いい面もありますけれども、障害もたくさんあるわけ、そういうものも防ごうということです。とにかくこの淡水化計画をやることによって、広島島の周辺も大改造して、それによって…当時、これを一九七〇年に発表したときは「地方の時代」という時代だったのです。七〇年から以降、七五年ぐらいから、「地方の時代」が始まるわけですが、七五年に地方の球団で初めて広島カープが優勝したわけですけども。

それで、河内設計事務所も、東京でも九州でも仕事をしようということになって。九州に大濠公園というのがあって、そこに、大濠公園の横にホテルをつくるという案を九州財界が集中して出資してやるということがあって、それに案を出したりしたので。実際にはできなかったのですが。その後、博多湾に、大レジャーセンターとタワーを建てようという

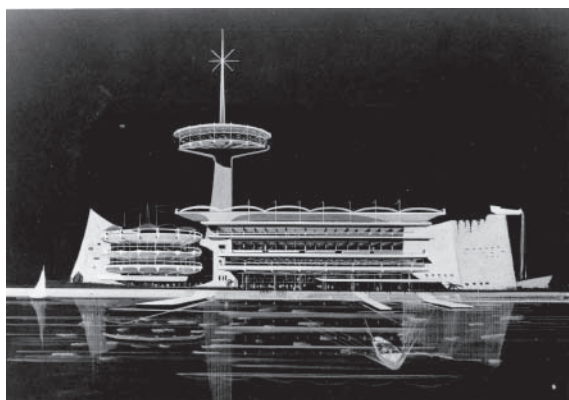


図2 九州大レジャーセンターのパス

案があつて、これも九州財界がみんな一緒に。中心になったのは、今はトピー工業になつている元東都製鋼社長で藤川一秋という人。岡崎の出身で「今家康」といわれていたような、なかなかの人物だったので、あと参議院議員になつたのですが、その人が経済同友会の代表幹事を東京でやっていて九州財界をまとめて、九州の港に大レジャーセンターをつくらうということになって、大濠公園がだめになつた案を提案していたいきさつもあつて、その提案を河内設計に求めることになりました。そのとき私が描いたパス（図2）がこれなのです。今になつてみれば、若気の至りのいろんなことがあります。その藤川一秋さんが、この画をすごく気に入つて、大プロジェクトを河内設計でやることになつたのです。それで、もう一つは、藤川一秋さん自身は私に何も言わないけれども、まわりの人が全部、あなたは藤川の下で仕事をしろと。つまりスカウトですよ。それで、東京へ来い、東京へ来いと言われることになつた、これは因縁のパスです。

河内さんのねらい

コーディネーター 河内さんは何がやりたかつたのでしょうか、非常に壮大なプロジェクトを提案されている狙いは何だったのでしょうか。少し現実から飛躍しているような計画が多いですよ。

錦織さん ここに河内設計事務所の、「地方の時代 広島で水と土地を考える」という、大きな構想の図がありますけれども、要するに、淡水化計画をやつて、都市と農村と島嶼部、広島まわり全体の問題点を全てこれで救えるということではありませんけれども、救おうということで、地域再生とか、地域振興だつたと思います。一九六〇年以降ぐらいから、日本そのものがそういう状況だつたと思います。ですが、河内さん自身は中村順平さん流のアーキテクトですから、市民病院だとか、農協ビルの窓の格子とか、そういうのにすごく繊細なデザインがたくさんしてあつて、ああいうふうなものがたぶん、ご自身の体的にはすごく好きだつたと思うのですよ。画も好きですけども。

コーディネーター そういうところは、農協の設計などでよくわかるのですけど、プロジェクトは何かこう発想を楽しんでおられた面もあるように思えるのです。行政から頼まれてから取り組むことではないのですよね。

錦織さん いいえ。全然違います。

コーディネーター 完全に自分で自由に提案されていたのですね。その狙いというのは、世の中をそのプロジェクトで動かそうとか、そういうのでもないのでしょうか。

錦織さん 淡水化計画などは、岡本悟さんと一緒に…この「大広島県総合開発構想提案」というのが一九七〇年に河内義就というふうにしてらっしゃいますけれども、これなど見ると、本気だったという感じがします。だから、大きな地域開発的な構想を建築家というものはすべきだというふうに。大文字の建築というのはあるけれども、大文字の計画というか、そういうふうなものに傾斜されていたと思いますよ。

コーディネーター 「河内設計事務所時代の主な作品」という表(表2)がありますのでご覧になっていただければと思います。これで私、非常に不思議に思うのが、まさに錦織さんが入所された昭和三六年ぐらいから、昭和四十一年の間は作品が少ないのです。李さんと私の努力不足で情報収集が不十分だったのかもしれないですけど、昭和三五、六年ぐらいまでは、ものすごく作品があつて、それから四一年ぐらいたまた出てきますけど、その間の作品が少ないのです。もしかししたら河内さんがそういう個々の作品よりも、もう少し別のところに精力を使っておられたのかなあと、思ったりもしますけれども。何かこれを補うような方法がありますか。

錦織さん 河内設計事務所にとっては、先ほど言いました博多のこの仕事は大プロジェクトであつて、(そのほかに)銀行の支店の設計とか、いろんなことがずつとあつたと思います。その当時何があつたのかというところ。女学院の、先日解体した校舎だとか。あのあたりは、三七、八年ぐらいの設計だったと思います。

コーディネーター そういう事例があるんですね。

錦織さん その当時、私は河内設計にいまして、本当に夜、寝る間もないというか、明日の朝までに計画案を四つ作れとかね、今では考えられないようなことをやっていました。

コーディネーター 李さん、この表をもっと、ちゃんと補っていく努力をしないといけませんね。

河内設計での仕事のやり方・その2

錦織さん 河内設計のその時代の話を少ししますと、優雅なところがあつて、朝、八時半ごろに出勤しますと、河内さんとか上野さんとかがいて、私もいて、みんなでコーヒーを沸かして飲むのです。それから当時、みんなで読んでいた雑誌が、「カサ・ベラ (CASABELLA)」だとか「ドムス (DOMUS)」とか「アーキテクチュール・ド・ジュールデュイ (L'architecture d'aujourd'hui)」とか「アーキテクチャー・ジャーナル (Architectural Record)」とか。アメリカ、フランス、イタリア、そのへんの外国の雑誌ばかりを読んで、ああだこうだ言つて、みんなでいろいろ議論ばかりしていました。

デザイン論の中心は、やっぱりその当時、上野勇さんだったような感じがしますね。例えば河内設計の、いちばん最初の広島工大の校舎でペントハウスを黄色にしたのがありますが、庇がピンと出たのね、あれなどは上野さんの仕事みたいなものです。その後、上野さんは広島工大にお勤めになって、今の広島工大の設計室などのデザインを直接おやりになっていますけれども、すごい才能のある建築家だったと思いますね。あの人は、手すりの立子がありますけれども、手すり特徴的でした、全部スラブの端部からね、「横ピンタ」って本人はおっしゃる。つまりスラブの横ピンタから手すりを支えるというふうにおっしゃっていて。それが、手すりの支えるところが横からこう出ていると、ここを掃除するのも楽です。それから実際に、支えるものが曲がると急に強度が増すので、まっすぐより。そういうふうなことがあつて、いま中村工社という建物が残っていると思いますけど、あれは、その横ピンタから出た手すりというのがついてですね、やたらと小さな壁に穴をあける人で、穴があいて、今でも結構通用するデザインの建物として残っていますけれども。

河内さんはとても地味な人で、あんまり華麗なデザインを好む人じゃなかったですから、私が戸建でのペントハウスなどのデザインで少しアールにしたり(曲線状にしたり)、少し波形にしたりというようなことをデザインすると、河内さんは必ず私に「これは、まっすぐにしとけや」と、いつもまっすぐにされる。まっすぐにされると、上野さんは仕事が終わったとき、必ず私をちよつと一杯、私はその当時、錦織の錦を「キンちゃん、キンちゃん」と言われていたから「キンちゃん、一杯行こうか」と言つて誘つてくれる。必ず上野さんとか松島さん

とかに、一杯飲み連れていってもらって、で「コウさんは」て、コウさんというのは河内さんのことですが、「コウさんは、夢がないよのう」と言いながらね、私を慰めてくれました。入所してからすぐ、二四歳ごろ、大野町の庁舎をコンペでやっていて、そのペントハウスを私にデザインしろということになりました。

そうそう、その当時の仕事のことを少し触れておきますと、広島に設計事務所は六つぐらいしかなかったですね。それで、どこに誰がいるか、全部知っていましたから。どこの設計事務所の誰の腕前がどの程度というのがみんなわかっていた状態です。それからもうひとつは、役所の人は、一斉に民間設計事務所の仕事を手伝っていましたから。多分もう、別にこういうことを言ってもいいと思いますが、大野の庁舎は、デザインは河内さんがこういういろいろやって、私がペントハウスのデザインをしました。ペントハウスは、あの不思議な形、複雑な形をしていて、コンクリートが打てないのではないかとようなものをデザインしました。それを松島さんと上野さんが一緒にやって、絶対コンクリートを打ってみせるから、完成してみせるから、好きなようにやれ、そういうことを言ってくれましたよ。若気の至りで描いた形は、コンクリートで作ろうと思ったら作れないのがいっぱいありましたが、それを必死になつてね。その上野さんは、もとは朝鮮総督府にいらつしやったと思いますけれども、当時、戦後、広島建築の設計者の中で一番きれいな図面を描くのではないかと噂の名人だったわけですが、そういうふうな人が、すごく支えてくれるということがありました。非常に楽しかったというか、そういう感じで、毎日を過ごしていましたね。

コディネーター その図面は残っていないのですか。

錦織さん わかりませんね。無駄なことを図面に描かないというのが当時大切で、きれいな図面でした。戦前は、日本全体として、絹の上に烏口で描いていましたね。だから絹の上に烏口で描く図面というのは、図面そのものとして美しくなきゃいかんということもあって、そんな感じのことを競い合ったことがあります。

他にも、寝てないのではないかというぐらいたくさん仕事をしましたけれども、遊ぶのも、真つ昼間から平気で魚を釣りに行ったり、それから建物を見に行っ

たり、というのはすごくありましたね。建物を見ると、もう一つは、建物を設計しているときの広さとか、それから、エレベーション、外から見たプロポーションというか、どのぐらいの間口があつて、どのぐらいの高さだということがあつたら、それと同じようなスケールのもを必ず探します。いくつもいくつも。上野さんが当時ルノーに乗っていたのですが、何かエレベーションで考えると、それと同じプロポーションのものを必ず探して、いくつもいくつも見に行くのです。

さっきの役所の人の話ですが、その大野庁舎の基本設計ができて実施設計するとき、人手がいるのです。それで河内さんが、誰かに頼まなきゃいかんと言って。河内さんが、「大芝水門のところに建設省（現在の国交省）の管理事務所ができて、打ち放しでなかなかポリウムがあつて、迫力があると」言うのです。今でも建っていると思いますけどね。で、あれを担当した人を探してこいという。それで建設省で、あれを担当した人を探して、その人を選んで、若輩の私などが描いた基本設計の図面を渡して、実施設計をしてもらいました。

藤本さん親子のこと

錦織さん それから藤本初夫さんという人が河内設計の構造を一手に引き受けていらつしやいました。藤本さんは藤本昌也さんのお父さんです。藤本昌也さんは私と同年ですけれども、私は高校時代、病気で一年休みましたから、一年遅れになったのです。藤本昌也さんは早稲田・建築の大学院生でした。私が藤本初夫さんのところへ、構造の折衝に行くわけです。この柱をもう少し細くしろとか、この柱をもう少し縦長にしろとか、この梁はもう少し小さくしろとか、その折衝に行くと、藤本昌也さんがいましたよ。あの昭和町のアパートにね。藤本昌也さんは、受験生の時代は、たぶん押し入れの中が自分の部屋だったと思います。押し入れの中からごそごそと出てきて。当時は狭い家の場合、公営住宅などの場合、子供は押し入れを自分の部屋にしていたケースが多いです。いまだに藤本さんとは幼なじみみたいな感覚なのです。

地域開発関係の計画や設計

錦織さん 私は一時、東京というか、少し日本的なスケールで仕事をすると

いう形になりました。昭和三十九年ぐらいに、工業整備特別地域だとか、地域開発とかいうことで、日本はもう大騒ぎだったのです。それで、日本地域開発機構というのを昭和四〇年に書いていますけれども、第三セクターの地域開発をする会社をつくらうということがあって、先ほど言いました、後にトピー工業になった東都製鋼の藤川一秋さんが、そういう会社を作らうと、全国からいろんな人を集めたのです。NHKから一人とか、小松製作所から一人とか、愛知県から一人、名古屋から一人とか。その集められた中の一人に私がいました。「日本地域開発」、その地域開発をする会社が立ち上がるまでのことをいろいろやりました。第三セクターというのは、作るまですごく面白いのです。特にこの日本地域開発機構は中部地方、名古屋を中心にしたところ、豊橋の先に蒲郡の元飛行場の跡の六角形のような島がありますけれども、そこを工業団地にする仕事をしました。それからその近所に田原町（現田原市）という、渡辺崋山の出身地があって、そこへ、その地域開発をした人たち、働く人たちのミニタウンを作らうという仕事があって、そういうことをいっぱい計画しました。後に、今のウッドワンの木材団地ができましたから、そこで地域開発をやりました。すさまじい仕事ぶりで、みんな集まって、中部地方の開発のことを考えるのに、仕事場は赤坂の料亭とかで、夜は酒を飲み、昼は仕事をし、夜昼なしの状況でした。昭和三〇年代末の話です。

広島工大での設計指導の思い出

錦織さん ところが、第三セクターができれば、銀行とか、いろんなところからいっぱい出向してこられて、もう面白くもおかしくもない会社になるのです。それで、そのときに集まったNHKの人だとか、いろんな生きのいい連中は全部辞めて、ぜんぜん違う組織が出来上がったのです。私も辞めた一人なのですが、そのときに広島工業大学へ上野さんがいらっしやって、広島工大で教えないかということで、少しの間教えました。一学年八〇人教えるのだ、と行ってみたら一四〇人いましたね。それで、一四〇人に私は設計を教えましたけれども、持ち時間では絶対教えられないので、こういうところに立って、大道芸人みたいなことをやって。それで若気の至りで、課題を見るのですけれども、全部を見られないので、私はそのとき楽々園（現佐伯区）にも家があって、見

ていない人は家に持ってきたら見てやるぞと。そういうことを、ここに大学の先生がいらっしやると思うのですけれども、絶対言わないと思いますよ。これは命に関わりますよ。本当に学生さんたちはね、夜みんな来ますよ。それでずつとやっている、もう夜な夜な遅くなるということがあって、うちのお袋の忠告でそれは辞めました。

東京にまだ私がいる頃から、河内さんのところでいつも会っていたりしているわけですが、広島県立美術館を共同で設計することが起こったのです。村田さんとか、白土さんとかが一緒だったと思いますが、広島的设计事務所が共同で設計するというので、各事務所から代表が出ていつて計画をするのです。それでその代表をまとめるのは佐藤重夫さんです。そのときに河内さんが東京に来て、河内設計の代表で出てくれないかいう。とんでもない話ですよ、今で言えばね。もう余所に勤めているのにね。自分には自分の仕事があるのにね。それで、広島工大で教えたりしながら、その設計団に加わっていたのです。その、県立美術館ですが、真ん中に通路があって横に小さな講堂があります。この石組みのあの講堂の部分は私の設計です。

そういうことをやっているうちに、河内さんがいろいろ仕事を手伝えというので、工大は八〇人が一四〇人だし、それじゃ手伝おうかと、もう一回河内設計事務所に戻帰することにしうかなと言ったら、河内さんが一番先頭になって反対したのです。もう、自分の事務所にしろと。それで私は自分の事務所を昭和四一年に開きました。二八歳だったと思います。当分の間は、千田町に事務所があって、千田町で河内設計事務所の千田町分室になって、いろんな仕事を河内さんから回してもらいました。その当時、せとうち苑とか、勤労者福祉会館とか、他にもいっぱいありますが、そういうものをやらせてもらいました。

河内さんから継承されたもの・異なる方向性

コーディネーター ありがとうございます。皆様のほうからも質問をお願いしたいのですけれども、私から一つ、河内さんから継承されたものはどんなことか、いろんな社会的な活動とか提案とかはやはり錦織さんもよくされていますけれども、そのへんは河内さんのやり方を学ぶというか、引き継がれたのでしょうか。あるいはやはり、かなり違う考え方なのか、それからその河内さ

んのやり方との違いをかなり意識的に展開されたようなことは何かおありでしょうか。

錦織さん 今となつては、河内さんの時代はやはり、めちやくちゃ進歩主義というか、成長主義だったと思います。さきほど、不登校というのがありましたけれども、学校へ行かないでずっと七塚原の山の中で子どもとき育ったような影響もあつて、比較的、成長主義という点については昔からそうではないというところがあつて、少しそれが開発至上でないという感じだと思えますね。ただ、さっき話したように、被爆後白島北町において、みんな火を消したというのがあつて、性善説ではないけれども、安直なボビュリズムやデモクラシーでもないけれども、やはり力を合わせて、部署部署でものをやるのが大事だということがある。特に広島の中ではそういうことです。ですから、さっきの青年部の話にしても、設計連合の話にしても、その他、建築家協会の大会も一九九八（平成十）年頃広島でやりました。それから私は今、建築士会の会長もしていますが、多分その点では河内さんと全く違うのです。河内さんは、専業志向だったけれども、私は専業志向というわけではない。河内さんの考え方は、中村順平さん流のエコール・デ・ボザールだし、エコール・デ・ボザールということは、やはりヨーロッパの建築家の考え方だと思いますね。私は、日本にはやはり日本の建築の作り方があると思うので、建築士会のように設計士もいるし、施工する人もいるし、二級建築士もいて、田舎で本場に工務店やつていらつしゃつて、必死になつていいものを作ろうとしていらつしゃる人がいますよね。それは河内さんに言わせれば建築家とは呼ばなかったと思うのだけれども、私はまあ、それも建築家の一人だと思つていいのです。従つて、多様な職域と多様な専門性というふうなものが、建築の中に溶け込んで、共同作業しているというのが、日本の建築のディテールの良さを支えている、というふうに思つたので、そこはもう河内さんとまったく違うと思うのです。河内さんはやっぱり建築家志向だったと思います。（未完）

謝辞

錦織亮雄さんには、「語る会」に際して周到な準備をしていただき、詳細な

ことまで思い出しながらお話をいただいた。また質問に対しても丁寧にお応えいただき、資料提供にもご協力いただいた。

なおDVDからの音声の原文書き起こしに際しては、小泉直子さんからご協力いただいた。

以上、記して謝意を表するものである。

参考文献（参考情報を含む）

- 1 広島県建築士会編 『広島の建築・1945～1955』（広島県建築士会、一九五六年）
- 2 広島県建築士会編 『広島の建築その2・1956～1961』（広島県建築士会、一九六二年）
- 3 広島県建築士会編 『広島の建築その3・1962～1982』（広島県建築士会、一九八三年）
- 4 李明・石丸紀興著 『近代日本の建築活動の地域性―広島近代建築とその設計者たち』（溪水社、二〇〇八年）
- 5 石丸紀興監修・李明著 『被爆都市ヒロシマの復興を支えた建築家たち』（宮帯出版社、二〇一二年）
- 6 河内義就講演記録テープ（一九八四年三月十日、同年三月二八日実施）
- 7 村田正講演記録テープ（一九八五年十月一日実施）
- 8 大旗正二ヒヤリング記録テープ（一九九九年二月十五日実施）
- 9 広島都市生活研究会編（編集主幹石丸紀興）『広島被爆40年史・都市の復興』（広島市企画調整局文化担当、一九八五年）
- 10 被爆五〇年記念史編集研究会編著 『被爆五〇周年 図説戦後広島市史・街と暮らしの五〇年』（広島市総務局公文書館、一九九九年）

脚注

- i 李明・石丸紀興著「終戦直後の広島における戦設計事務所活動について―戦前・戦後の広島における建築家の活動とその役割に関する研究―」（『日本建築学会計画系論文集』第537号、二〇〇〇年十一月）pp.313-318
- ii 李明・石丸紀興著「建築家大旗正二の経歴と建築活動について―地方における建築家の活動に関する研究―」（『日本建築学会計画系論文集』第575号、二〇〇四年一月）pp.191-197
- iii 李明・石丸紀興著「建築家河内義就の建築活動について」（『日本建築学会計画

系論文集』第617号、二〇〇七年七月) pp.215-222

iv 参考文献6、7、8など、一九八四年頃に実施した講演会やヒヤリング記録のテープが残っている。

v 参考文献5参照

写真・図版リスト ※印の写真是講演当日使用したものとは異なります。

※写真1 広島市公文書館所蔵

写真2 錦織亮雄氏提供

※写真3 広島市公文書館所蔵

写真4 佐々木雄一郎氏撮影・塩浦雄悟氏所蔵

写真5 広島市公文書館所蔵

写真6 広島市公文書館所蔵

写真7 佐々木雄一郎氏撮影・塩浦雄悟氏所蔵

写真8 丹下健三氏撮影・内田道子氏所蔵

※写真9 広島市公文書館所蔵

写真10 錦織亮雄氏提供

写真11 錦織亮雄氏提供

写真12 錦織亮雄氏提供

図1 錦織亮雄氏提供

図2 錦織亮雄氏提供